

第26回
釜山国際映画祭招待作品

第64回
日本ジャーナリスト会議賞

第33回
アン・ジョンビル自由言論賞

標的

ねつぞう
真実か。捏造か。



推薦
日本カトリック正義と平和協議会
自由法曹団

監督・西嶋真司 配給・グループ現代
2021年/カラー/99分/ドキュメンタリー

映倫
CERIN
21781-A

「捏造記者」の汚名を晴らす闘いが始まる。

1991年8月、元「慰安婦」だった韓国女性証言を始めているという記事を世界で初めて報じた朝日新聞大阪社会部の記者・植村隆。安倍晋三衆議院議員が首相として政権に復帰した後、2014年になって「捏造記者」という執拗なバッシングが始まった。誹謗中傷は次第にエスカレートし、彼が教職に就くことが内定していた大学、そして家族までもが卑劣な脅迫の対象となったのだ。この韓国女性が名乗り出た後、他のメディアも植村と同じような記事を伝えたが、なぜ彼だけが「標的」にされたのか？ 一方、不当な攻撃によって言論を封じ込めようとする動きに対抗するために、大勢の市民や弁護士が支援に立ち上がった。

本作は、植村と彼を支える人々が理不尽なバッシングに真正面から立ち向かう姿を記録したものである。2021年の第26回釜山国際映画祭へ正式招待（ワイドアングル部門ドキュメンタリーショーケース）されると、韓国メディアから高い注目を集め、監督を務めた西嶋真司は、アン・ジョンビル自由言論賞を30年余りの歴史の中で日本人として初めて授与された。

こんな理不尽な、不条理な事態に巻き込まれたとしたら、あなたはどうしますか？ 次はあなたが「標的」にされるかもしれない。残念ながら、今はそういう時代かもしれないのです。そんな恐怖と危険に敢然と立ち向かって、理解ある仲間とともに立ち上がった一人の記者の姿が、この映画に克明に記録されています。

「放送レポート」編集長 岩崎 貞明

過去の記事を「捏造」と決めつけられ、家族が脅迫されたり、再就職の道を絶たれたりする事態は、今のネット社会では全ての記者に起こりうる。記者が萎縮することなく、自由に取材できる環境を維持する必要性は今、ますます高まっている。

元新聞労連委員長 新崎 盛吾



ドキュメンタリー映画 「標的」&トーク

▷主催：映画「標的」釧路上映実行委員会
▷協賛：週刊「金曜日」釧路読者会

連絡先：Tel 080-5595-7022（岸本）

2022年6月19日(日)

▷開場 13:00 上映 13:30～(99分)

▷15:00～16:00 植村隆&西嶋監督トーク

▷会場：釧路市生涯学習センター

（まなぼっと）2F多目的ホール

▷入場券：1000円（学生無料）